

平成12年11月21日

住友銀行 平成12年度中間期決算 記者発表における主要質疑応答

(質問) なぜ不良債権処理が当初見込みより増えたのか。

(回答) 上期の一番大きな要因は熊谷組。同社より債権放棄の要請を受けて不足分の引き当てを行ったため。

(質問) 熊谷組への追加の引き当てはいくらか。

(回答) 債権放棄要請により所要額を個別引当金として引き当てたが、上期のネット負担は約1,200億円。つまり、上期は熊谷組については、一般貸倒引当戻入約1,100億円、追加引き当て約1,200億円、あわせて約2,300億円を個別貸倒引当金に繰り入れた。

(質問) 地銀などで熊谷組の債権放棄要請に応じないといっているところもあるようだが、このような事態による引き当ての積み増し、下期の業績に与える影響についてはどうみているか。

(回答) 広い範囲で調整を要することであり、そう簡単ではないが、ただいま鋭意交渉中であり、早期に固まって欲しいと思っている。

(質問) 負担増はどれくらいになるとみているか。

(回答) 引続き交渉中であり、負担増については考えていない。

(質問) 熊谷組宛債権は放棄後はどこに分類されるのか。

(回答) 債権放棄後は危険債権からはずれることを期待している。

(質問) 熊谷組の再建計画は12年だが、危険債権からはずれるのか。

(回答) 12年というのは、あくまで主要5行以外の借入金を完済するまでの計画期間。当初2年間は経営体制の抜本的な立て直しの期間、次の5年間は新しい飛躍への地固め、あるいは経営・業務体制を固めていく期間と位置づけており、基本的には7年で決着をつけるというもの。危険債権からはずれるものと考えている。

(質問) 当初の今期不良債権処理見込み2,500億円の内、熊谷組についてはどれくらい織り込んでいたのか。

(回答) 非常に難しいが、もし来期必ずいくら償却しなければならないと分かっていたとしたら、それはその期にやっておくべきもの。蓋然性の足し算で全体を丸めていくしかない。したがって、個々の企業がどういう経営判断をするか、あるいは経済環境がどうなるのかなど

絡むので、不良債権処理の当初の見通しと実績を比べるのは理論的には可能かもしれないが、実務的には難しい。したがって、熊谷組については、蓋然性の一部には入っていたが、いくらといわれても明言できない。

(質問) 危険債権が増えているのは熊谷組宛債権か。

(回答) その通り。熊谷組について言えば、約5,000億円危険債権が増え、要管理債権が約2,100億円減少している。

(質問) 金融再生法開示債権の業種別で建設業向けが平成11年9月末対比5,000億円増加しているのはなぜか。

(回答) 熊谷組向けの債権。

(質問) 連結ベースの今期の不良債権処理見込みは。

(回答) 上期の不良債権処理額の連単差は300億円程度だったので、単体ベースの3,500億円より若干増えるかと思う。

(質問) 上期の不良債権処理が当初見込み対比増えたものに対する処理源資は。

(回答) 一部は株式の売却益も入っている。

(質問) 下期の不良債権処理見込みも増えているが、この処理源資は。

(回答) 基本的には業務純益を積み上げていきたいと考えているが、一部は株式売却益を充てることもあろうかと思う。ただ、上期は大阪府の外形標準課税導入の影響が一気に出ているという要因があったが、下期にはそれはなくなる。

(質問) 不良債権処理の山は本当に越えたのか。

(回答) 大きな山は越えたと思っている。但し、構造改革の進展や会計基準の変更等に対応する形で一部の企業が経営の抜本的見直しを行うとみられることもあり、不良債権処理は当初見込み対比増える。当行はさくら銀行との合併を控え、12年度下期が最後の半期であり、新銀行スタートに向けて不安の残らぬよう今期処理を進めるという要因もある。

(質問) 持ち合い株式解消の今期の見込みは。

(回答) お客さまのご了解を得た上で売却を行っていくので、具体的な目標数値はないが、さくら銀行と統合すると大きな額になるので、圧縮していく方針。個別の株の動き、全体の相場など市場動向に留意しつつ対応していきたい。

以上